

国語総合

次の文章は、菊地大樹『日本人と山の宗教』からの一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、原則として句読点やカッコは一字に数えます。

ここでは、山を根城^aとして特徴的な宗教活動を繰り広げた念仏行者、播隆^{ばんりゅう}に注目することにより、山の宗教の横の広がりを実感してみよう。江戸時代後期における播隆の活動は、前近代の山の宗教のもつとも成熟した姿を見せるとともに、近代登山への胎動をも感じさせる。播隆は文政一一（一八二八）年に、昔より未踏の山であった信州鎗嶽（槍ヶ岳）に初登頂する。立山では表むき、いまだ剣岳が登つてはならない山とされていた江戸時代後期、すでにこのように山林修行者^bによるアタックを受け入れ始めた霊山もあつたのだ。彼は次のように述べている。

そもそも信濃国鎗ヶ嶽は名だたる高山であり、麓は飛驒・信濃両国にまたがり、峨々^{がが}として雲に聳えている。一〇里ばかりも登ると、その頂上に、名にし負う鎗岩がある。その高さはおよそ一〇〇間である。この頂上は、昔より踏み登った人がいない。

（『信州鎗嶽略縁起』）

雲に向かつて一〇里も登るといふが、実際の標高三一八〇メートルに比べてややコダイ^アな表現だ。しかしふもとから目測すれば、なるほどそのような距離を感じさせたのかもしれない。

播隆はこの霊山を仰ぎ見て、登頂を発願^{ほつがん}した。はじめて山頂に達すると、銅像の阿弥陀如来および観世音菩薩、そして木像の文殊菩薩の三尊を頂上に安置した。ところがこの場所付近は直立の鎗岩なので、一般の人が登ることのできる便宜は絶えてない。

せつかく安置した尊像にひとびとが参拝することもできないまま、^A労多くして功なしというありさまであった。このときの播隆に、山頂をはじめ「征服」したなどという発想はおよそない。彼はあくまで念仏行者として、続いて多くのひとびとが頂上まで到達し、尊像を拜することをまず願ったのであった。

そこで播隆は六年後、ひとびとを引き連れて登山道を整備する。信心の篤い^C彼らを語らい、頂上をならして石を敷き、縦三間(約五・五メートル)・横九尺(約二・八メートル)の平地を造成した。また木を彫って、四方が一尺二寸(約四〇センチメートル)の祠を造り、銅像の釈迦仏を安置したという。はじめ、この尊像を荷つて一〇〇間の鎗岩を登った時には、尊像の顔より汗が流れた。これを目の当たりにした者たちは、みなキイ^Eの思いをなす。か^Bかる靈驗^Bを尊像が現されたことは、いよいよ末世のいまに仏の利益^dをもたらす前触れであろうと、みなともに^ウカンキの涙を流したのであった。

背中に負われて太陽に曝^{さか}され、温められたブロンズ製の尊像は、急激に高度を増したことにより周囲の気温が下がり、温度差から表面に結露を生じたのであろう。そのことは、播隆以下同行者にも経験的には分かっていたはずである。それにもかかわらず江戸時代のひとびとは、なおこの現象を宗教的な(靈驗)として捉えていた。

つづいて、信州松本の佐助・又重^{またじゅうろう}二人が登山した時には、蝶^{ちよう}ヶ嶽に登って鎗ヶ嶽を遠望したという。このとき空から五色の光が糸の如くに降って鎗岩の根まで照らし、半時ばかりにして消えた。この様子を拜したことで、彼らはますます喜んだ。さらに播隆は、つぎのように書き留めた。

また八月六日の払曉に(槍ヶ岳)頂上に登り、日光を拜し、また北方の空中を瞻^あぎ見ると、円周が四、五間ばかりの円光が現れた。しかし、本尊は見え給わなかつたのである。これは、罪障の雲が覆つたためであろうか。

ここから分かるように、^C播隆らが求めたのは決して登頂そのものの喜びや達成感だつたのではない。彼は、山でしばしば観察されるようなさまざまな自然現象を、そのつど神仏が感応して靈驗を現したのであると解釈してゆく。そのひとつひとつから、自分

の山林修行の成果によって衆生が利益を蒙るといふ確信を得ようとしていたのである。これこそ、念仏行者としての彼の願いであつた。

ここに見える「円光」とは、靄もやに覆われた早朝の山頂でよくみられる、いわゆるブロッケン現象に他ならない。御来光を拝したのち、仏の背後に射す円光は見えなかったものの、その中心に立つはずの本尊は見えなかったとここで播隆は語っている。その理由を、自身の罪障が雲となつて本尊の姿を覆つてしまつたと理解したのである。

ブロッケン現象の仕組みが科学的に説明されていない当時であっても、自身の影が霧エにウツつたものと分らないわけでもなかつただろう。しかし、先ほどの銅像表面の結露と同様、あくまでそこに宗教的な意味を読み込もうとするのが、この時期までの登山の本質であつた。このように播隆はアルピニストではなく、あくまで「一向専修念仏行者」として槍ヶ岳登頂を試みたのであつた。

(中略)

播隆はまた、飛驒かき笠ヶ岳にも登つていた。この山は、江戸時代の前期から、じゃっかんの登頂記録が残されている。したがつて文政六(二八三三)年、播隆が目指したのは再興登山であつた。この山を約七〇年後の明治一七(一八九四)年に登つたのが、イギリス人ウォルター・ウエストーンである。ウエストーンは宣教師であつたが、ヨーロッパアルプス登頂の経験もあつた。日本には三度長期滞在しているが、そのときの経験を『日本アルプス——登山と探検』などとして著し、山々や当時の風習を世界に紹介した。

(中略)

明治二七年七月三〇日、ウエストーンは「汝最初に成功せざるとも再度試むべし！」との決意を抱いて笠ヶ岳へ向かう。彼の笠ヶ岳へのアタックは、ガイドが得られなかつたことなどにより、以前に失敗していたのである。信州松本のパン屋が洋式パンの製造に手をつけたと聞き、ここで三ダースもの小さな食パンを買い入れると、リュックサックにつめて「傘の峰」に向かつた。これまで登山口の蒲田かまたでは、村人はまったく登山に非協力的で、その目途を達せずにはいた。今回も同様で、彼は村の神社の石段に打ち沈んで腰かけていた。すると、そばで見えていたひとりの人が宿泊を世話してやろうと言ひ出す。その家で道案内のために紹介された、中

島という獵師との出会いを、ウェストンは印象深く述べている。

午後彼は登山の計画を相談しに私たちを訪ねて来た。そして自分の属している獵師の組頭の中島という人を連れて来た。この人はがっちりした顔形のととのった人で、私の経験したことほとんどないような容貌の持主だった。前に路で会った獵師もこの階級では珍しく秀麗な人で、レヴァント Levant の海岸のどこかからやって来たように思えるくらいだった。

(中略)

ここで登山計画について相談しているうちに、ウェストンは過去三年間に地元のひとつとが彼の登山に反対した理由がやっと分かってきた。中島は彼に、以下のように話した。

蒲田の人たちは、どうにもならないほど迷信的です。笠岳の人けのない絶壁や峡谷には、力の強い山の精が歩き廻っていると
言いはつています。もしもこの谷間に住んでる人たちが、穀物などが稔る時期に見知らぬ人を山の境内に案内して行こうもの
なら、きつと荒れ狂う嵐が谷を襲うに違いないと信じています。彼らはこの嵐を、神聖をけがす罪を助けた人のせいにしてし
まい、それにふさわしい罰をすぐに加えるでしょう。

この中島の説明は、(あ)江戸時代と地続きの一九世紀末における、ふもとに暮らすひとつの山に対する心性を記録したも
のとして重要であり、同時期の山の宗教の一面を間違いない物語つてもいる。この説明からは、一般的な山の聖域性を語るのに加
えて、穀物の豊凶と山への信心が密接に結びつけられていることが分かる。山の神々はただ山中にいますのではなく、里のひとつ
との生活と密接に結びついていた。柳田國男が「先祖の話」において説くように、祖霊である山の神が毎年里にオコウリンして田の神
となり、収穫の後に山に帰るとする民俗信仰ともかなりの程度一致すると見てよい。

ただし、そうした心性が形成される背景には、(い)過ぎ去ったはずの幕藩制下の支配が、山への立ち入りを政治的に抑制した影響がまだ残っていた可能性もある。急激な近代化に敏感であるがゆえに、前近代的な信心がかえって強化されるということも、ときには想定してみなければならぬこともある。いつぼうで中島らは、明治に入つて約三〇年が経過する中で変化してきた、山間地域のひとびとの気持ちを代弁しているかもしれない。

(中略)

こうして獵師である中島の案内を得て登山を決行した一行は、ついに頂上付近の稜線へと至る。そこから見える風景を、ウェストンは詳しく描写した。

双六川の谷間へ落ち込んでいる左側の傾斜は、おもに這松でおおわれている。しかし右側には、野性的な砕けた岩が槍ヶ岳の西の断崖へ突き出ている。穂高山と槍ヶ岳をつなぐ壮麗な岩稜は、日出づる国にその比を見ない高さ二、三〇〇メートルの城壁のような巨大な絶壁の線を表している。灰色の水蒸気の渦巻く帳がそここにゆらゆらと立ち昇っているが、北には立山、南には富士がそのあいだから見えた。

(う) 播隆が槍ヶ岳を目指した時、彼の関心は(え) 槍ヶ岳そのものに張り付いていた。蝶ヶ岳に登頂した同行者の視線も、やはり槍ヶ岳に向けられている。つまり、目的の霊山以外に周囲の山々に対する関心は、播隆らにはほとんどなかったのである。これに対してウェストンは、稜線から見える立山・富士といった周囲の眺望に目を向け、おおいに楽しんでる。現代のわれわれからすれば、この眺望が登山のもっとも大きな目的のひとつであり、むしろウェストンにこそ大いに共感するだろう。しかし、前近代の信仰登山においては、実際のところ目的とする山以外への眺望には恐ろしく関心が低い。ここには、信仰を主目的とする前近代の登山と近代登山との大きな断絶があった。列島中央に広がる山塊をはじめ「アルプス」と捉えたウェストンならではの視点こそ、現在のわれわれの登山に直結しているのである。

こうして稜線からの眺めを楽しみながら、一行はついに頂上に至る。

頂上へは二時四十五分に達したが、その頂上で、猟師たちがいつか前にのぼった時に立てた小さな記念の堆石標ケルンを見た。その猟師たちを除いては——または彼らの仲間の数人を除いては——日本人でもヨーロッパ人でもよいが、私たちが頂上に足跡を残した最初の登山者だと話してくれた。

じつは、さきにも述べたように笠ヶ岳登頂は、すでに江戸時代に何度も達成されている。しかしウェストンは、「G」であることを、ことさらに誇らしげに記している。かつての播隆が、あとに多くのひとびとが続くことを願っていたのとは違って、むしろみずから最初に頂上を征服した人であることを強調しているのである。

ここには、「頂を極める」という西欧近代的な登山観が露骨に表れている。ウェストンも宣教師という意味では播隆と同じ宗教者であったが、しかしふもとのひとびとの山に対する信心を、克服すべき迷信的なものとどこかで見ていないだろうか。この信心についても、またみずからの初登頂についても、ウェストンは『日本アルプス——登山と探検』の中で、中島ら案内人が「話してくれた」と表現した。その瞬間、ウェストンは西洋人として自身が主観的に考えたに過ぎなかった山の心性を、明治日本のひとびとに語らせることによって、たくみに客観化Hしたのである。

*問題作成の都合上、文章の一部を変更しています。

問題

問1 —線アくオのカタカナを漢字になおしなさい。

問2 —線aくeの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問3 (あ)く(え)に入れるのにふさわしい語をそれぞれ次から選び、番号で答えなさい。同じ番号は一度しか使えません。

- 1 かつて
- 2 すでに
- 3 いまだ
- 4 ついに
- 5 つねに

問4 —線A「功」とありますが、ここではどのようなことですか。二十五字以内でまとめなさい。

問5 —線B「かかる霊験」とありますが、ここではどのようなことですか。本文から分かる範囲で書きなさい。

問6 —線C「播隆らが求めた」ものとは何ですか。本文から三十字以内で抜き出しなさい。

問7 —線D「ガイドが得られなかった」とありますが、なぜ得られなかったのですか。

問8 —線E「ふもとに暮らすひとびとの山に対する心性」とありますが、それはどのように捉えられていますか。本文から探して三字で答えなさい。

問9 Ⅱ線F「明治に入って約三〇年が経過する中で変化してきた、山間地域のひとびとの気持ち」とありますが、どのように変化したのですか。本文から分かる範囲で書きなさい。

問10 「G」に入れるのにふさわしい表現を本文から探して書きなさい。

問11 Ⅱ線H「客観化」とありますが、それにはどのような効果がありますか。もつともふさわしいものを次から選び、番号で答えなさい。

- 1 一般的に見せる
- 2 特殊に見せる
- 3 先鋭的に見せる
- 4 近代的に見せる

問12 Ⅲ線「前近代の登山と近代登山との大きな断絶」とありますが、本文から読み取れる「大きな断絶」を百五十字以上二百字以内でまとめなさい。